

九州地域主要畑作地帯間の農業経営展開の比較

弓 削 勇 吉 (九州農業試験場)

YUGE, Y.: Differences in the Pattern of Farm Development between main Upland Farm Areas in Kyushu

1. はじめに

異なる農業地域間の農業経営方式を比較することによって、比較的農業経営の展開が遅れた地域の農業経営上の諸問題点を明らかにし、かつその打開策を考えてゆく糸口を見出すことができる。以下においては南九州と中九州のそれぞれの畑作地帯における農業経営展開の相違点を明確にし南九州畑作地帯における農業経営展開の阻害要因を考察した結果を報告する。

2. 比較分析の方法と対象

南九州畑作地帯では鹿児島県曾於郡を、中九州畑作地帯では熊本県菊池郡と鹿本郡植木町を合わせた地域を対象にし、農業センサス集落カードのデータをもとにそれぞれの地帯から集落群を選定し、その集落の全農業経営のセンサス個表データを中心に、両地域の総体としての農業経営の比較を試みた。

3. 対象畑作地帯間の農業経営の比較

中九州畑作地帯の上記の地域（以下菊池台地と呼ぶ）の1戸当たり経営耕地面積は南九州畑作地帯の曾於郡のそれより3割方大きく、また1960年から1975年の間における経営の拡大もより顕著であった。地目構成についてみるために水田率の変化をみると1960年では両地域とも殆んど差がなかったが、1975年では開田の進んだ菊池台地の水田率が格段と高くなっている。また経営耕地面積150a以上の農家の割合は菊池台地では38.4%であるのに対し曾於郡では16.6%に過ぎない。云いかえれば曾於郡における農業生産は各作目ともより小規模の多数の経営によって担われている。とくに菊池台地における牛乳と陸稲の生産では250a以上の上層農による生産の占める割合がそれ以下層の生産より大きい。そしてこの傾向は工芸作、甘しょ作（菊池台地の場合は生食用）にも見られる。両地域の経営の差を販売の面からみると、曾於郡で選定した集落群の農家においては子牛生産部門を販売額第1位の部門とする農家の数があらゆる経営規模階層において圧倒的に大きく、合計44.9%を占め、その他は甘しょ、水・陸稲、工芸部門を販売額第1位部門とする農家がそれぞれ18.9%、12.9%、10.5%であるのに対し、菊池台地で選定した集落群では水・陸稲部門を販売額第1位とする農家の割合が27.2%で一番大きく、つぎに野菜作、工芸作、酪農の各部門がそれぞれ17.6%、

17.2%、9.8%でつづいており、曾於郡のような偏りはみられない。つぎに経営類型毎の経営方式を比較するために両地域で共に生産されている作目の生産がそれぞれどういう状況で生産されているかを見た。まず子牛生産では曾於郡においては子牛生産自体が大部分の農家の所得形成に大きな役割を担っているのに対し、菊池台地においてはまず子牛生産を行う農家自体が少なく、また子牛生産農家も食用甘しょ、タバコ作の方を主要な所得形成の場としている。つぎにタバコ作をみると曾於郡の場合、大抵の場合は子牛生産が副次部門として結びついているがタバコ作部門所得の割合が高いのに対し、菊池台地の畑地利用のタバコ作の場合は乳牛10頭前後の酪農、水田利用のタバコ作の場合は1ha以上の水稲作と結びついている場合もあり、必ずしもタバコ作部門の所得割合は高くない。また露地やさい作は曾於郡の場合、子牛生産と結びついた少品目生産でありやさい作部門の所得額、所得割合はあまり大きくないが、菊池台地ではやさいの多品目生産が行われ、やさい部門所得も大きくまたその割合も大きい。

以上のように菊池台地では経営耕地面積及びその他の経営条件に応じた作物の選択が進み、異なった型の経営方式が成立しているのに対し、曾於郡の大部分の農家は子牛生産と水・陸稲作及び甘しょ作を基調にした経営方式をとっている。

このような差異は、家族労働力の構成とも大きな因果関係にあり、菊池台地では親子2世代の家族経営が18.4%を占めているのに対し、大隅町では7.2%にすぎない。

このような経営展開の差は農業の基盤整備の差及び市場条件の差によるところが大きい。

4. 対象地域の比較に基づく問題点

曾於郡で経営耕地規模が小さいのは多分に社会的、歴史的問題であるが、今後は農業経営体を形成、あるいは一定方向に展開しつつある経営においてはそれを維持するという方向での家族労働力の組織化と生産手段の相続が考慮されるべきであろう。またそのことによって土地改良、水利開発等に対するより積極的取組みが可能ともなろう。他方、市場劣等地という条件は固定的なものでなく、共同購入、共同販売体制による大量輸送方式をとることによってかなり克服することができる。